

殊更、信玄の少年愛は有名だったし、その懐刀ともいえる幸村がそれを交わしていないなど思ってもいなかった。

「お前、誰かと閨を共にしたことはねえのか？」

「はっ、破廉恥な、そのような事、一度もありません。」

政宗は衝撃を受けた。自分とあまり年の違わない。しかも身分もそう高くはない小大名の二男で、しかも見目が良い幸村が誰とも寝たことがないわけがない。そう思っていた。だが、この様子を見ると、幸村の言葉は事実の様だった。

「そりゃあ、よかった初物は寿命が延びるっていうしな。」

「某は食べ物ではございませぬ。」

「だが、俺のモンだ。」

キツと睨みつける政宗の眼光は鋭く、それは戦場の時と同じモノだった。

政宗は寝巻きを捲り上げ一括りにした手にさらに巻きつけ幸村の体の下に敷いた。これで幸村は手を挙げたままで身動きがさらには取れなくなった。

今、幸村の身にまよっているものは下帯と傷に巻かれた包帯だけだ。その下帯に政宗は手を掛けると力任せに解いた。解くというよりもむしろ、摺り下ろすと言った方が正しいだろう。幸村の下肢が政宗の前に曝される。

「初物ってのはホントだな。この色じゃ、独りで弄ったこともねえんじゃねえのか？」

「やめてくださいな、政宗殿。」

幸村は自由になる足で何とか政宗を蹴りあげようとするが、政宗はその両足首を掴むと難なく広げてしまった。

「それは聞けねえな。お前に決定権はねえんだよ。」

その広げた足の間に政宗は顔を近づけた。

幸村の今まで誰にも見られたことのない秘所が今、政宗の前に全て曝されていた。

「後ろもキツそうだな。こりゃ、しつかり慣らさねえと切れるな。」

そう言って政宗は幸村の陰囊を撫で上げた。

「ひっ」

陰囊だけではなく、縮みこんでいる陰茎を扱きあげると幸村の息は荒くなった。誰にも触られた経験が無い幸村にとって政宗の手管は巧みだった。あつという間に先端から先走りを滴らせる程に勃起あげさせた。

「あつ、あう、：は。」

できるだけ声を殺そうと努力するが、政宗はそれを楽しんでいよう、ワザと大きな声が出るように幸村の息を吐くタイミングに合わせて扱きあげた。

「はうっ」

戦場で見るのとは正反対の艶を見せられ政宗も興が乗ってきた。

政宗は自分の唇を舐め、舌舐めずりをすると、懐から何か取り出したが、政宗の与える快樂に必至で堪える幸村はそ